

Title	日本語の発話冒頭における言語要素の研究 : 相互行為から見る冒頭要素の順序
Author(s)	伊藤, 翼斗
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/34547">https://doi.org/10.18910/34547</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 伊藤翼斗 )

論文題名

日本語の発話冒頭における言語要素の研究 —相互行為から見る冒頭要素の順序—

## 論文内容の要旨

本研究の目的は、日本語の会話における発話の冒頭に用いられる「えっ」「あっ」「なんか」「で」といった言語要素（発話冒頭要素）が複数使用される際に、それらの言語要素がどのような順序で使用されるのかについて明らかにすることである。そのために、本研究では会話分析の手法を用いて、日本語による電話会話の分析を行なった。これまでの発話冒頭要素に関わる研究の多くは個別的な要素に注目するものであるが、本研究は複数の発話冒頭要素同士の関係に着目するものであり、より現実の言語使用をトータルに扱っているという点で意義があると言える。

発話冒頭要素は複数使用される際に使用順序があり、その順序を説明するのに冒頭要素を二つに分類することが有効である。その二分類とは、①前に起きた事態に対して自身の認識の変化や判断などを示す「遡及指向要素」（「えっ」「へー」等）と、②それ自体では発話を構成せず、直後に自身の発話が続くことを予期させる「後続指向要素」（「なんか」「で」等）である。複数の発話冒頭要素が使用される際には、[遡及指向要素 → 後続指向要素]という順序になる。また、この二分類は、「同じ要素群に属するものを立て続けに用いることができるか」という観点から見るならば、発話の冒頭で後続指向要素は複数使用できるが、遡及指向要素は基本的には一つまでしか用いられないという制約がある。

遡及指向要素は、発話の冒頭で「基本的には」一つまでしか用いられない。しかし、特定の環境においては複数使用されることもある。そのような事例において、複数の遡及指向要素には順序があり、遡及指向要素を①特定の発話に対する「認識の不一致への対処」を行なう要素（「えっ」や「あっ」等）と②先行発話から「求められた反応」を行なう要素（Yes/No質問の後の「うん」等）とに分類することで、その順序が説明できる。つまり、複数の遡及指向要素が使用される際には、[①「認識の不一致への対処」 → ②「求められた反応」]という順序で用いられるのである。このような事例では、当該の発話で先行発話に対する二つの対処をする必要が生じたため、遡及指向要素が複数使用されている。多くの場合、先行発話から求められる対処は一つであり、複数の対処が必要な環境は少ない。また、複数の対処が求められた際には、二つ以上の発話で分割して行なうこともできる。このような理由で、遡及指向要素が複数使用される事例は非常に少ないのである。

後続指向要素は「断絶をマークする要素」（「あ」「ねえ」「で」等）と「断絶をマークしない要素」（「なんか」「たぶん」等）とに分けることができる。「断絶」とは、直前までの連鎖の展開から見て、後続する発話が直前の連鎖との境界を示していることである。なお、新しい連鎖が開始される時、常に「断絶」が示されるわけではなく、ある特定の連鎖環境において示される境界を「断絶」と本研究は呼んでいる。その特定の連鎖環境とは、①広い意味での挿入から元の連鎖に戻る際、②関連のある複数のものを取り上げる際、③直前とは異なる新しい連鎖を開始する際の三つである。この「断絶」は、後続指向要素が複数使用された際の順序に関わっている。複数の後続指向要素が使用される際には、[「断絶をマークする要素」 → 「断絶をマークしない要素」]という順序になるのである。これは、「断絶をマークしない要素」を先頭に配置し、その後で「断絶をマークする要素」を使用してしまうと、先行した要素との間に境界を作り上げてしまうからである。それゆえ、「断絶をマークする要素」は他の後続指向要素に先行するのである。

以上のような順序規則は、相互行為の外部から参加者の発話を制約するものというより、参加者によって使用される規則であると言える。実際、通常の配置位置以外の場所で冒頭要素が使用される事例を検討すると、このような場所で冒頭要素が使用されることで、「自己修復」、「引用」、そして「立ち遅れ反応」という特定の行為がなされていた。このことは冒頭要素の順序規則が何らかの行為を示すための道具になりうることを意味するだろう。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 伊 藤 翼 斗 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	筒井 佐代
	副 査	教授	小矢野 哲夫
	副 査	教授	鈴木 睦
	副 査	教授	真嶋 潤子
	副 査	教授	堀川 智也

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の会話における発話の冒頭に用いられる「えっ」「あっ」「なんか」「で」などの言語要素について、それを複数使用する際にどのような順序で使用されるのかを、実際の会話データに基づき、明らかにしたものである。本論文で発話冒頭要素と呼ばれているもののうちのいくつかは、先行研究では、接続詞、感動詞、応答詞、あいづち、談話標識、フィラーとして、個別に研究対象として扱われ、会話における働きについての分析がなされてきた。しかし、会話においては、一つの発話の冒頭に、これらの要素が複数用いられることがしばしばあり（「うんだから一ねえほら、なんかそういうの考えると考えちゃうけど」）、その際どの順序で用いられるかについては、研究がなされていない。その点で、本論文は、会話における発話の語順に関する研究として位置づけることのできる、先駆的な研究として評価できる。

研究方法として、会話分析の手法が採用されており、電話会話コーパスからのデータ約223分が分析データとして使用されている。このコーパスはアメリカ在住の日本語母語話者がデータ提供者となって作成されたコーパスであるため、日本語が英語に影響を受けている可能性がないとは言えない。このデータの偏りについては本論文の弱点であり、今後日本在住の日本語母語話者と比較して、分析結果の妥当性を検証していく必要がある。

分析結果としては、まず、直前の発話や事態に対する話者の認識の変化や判断などを示す《遡及指向要素》（「えっ」「へえ」「うん」「いや」など）と、直後に続く自身の発話を予期させる《後続指向要素》（「で」「あの」「なんか」「だから」など）という二分類が設定され、発話の冒頭で使用する際の順序として、《遡及指向要素》が先に、《後続指向要素》が後に来ることが指摘されている。続いて、《遡及指向要素》の下位分類として〈認識の不一致への対処をする要素〉（「えっ」「あっ」など）と〈求められている反応を示す要素〉（「あ」「いや」「うん」など）、《後続指向要素》の下位分類として〈断絶をマークする要素〉（「で」「まっ」「ね」「あっ」など）〈断絶をマークしない要素〉（「ほら」「あの」「それで」「じゃあ」「とりあえず」など）が、それぞれ設定されており、これらすべての分類の順序規則として、〈認識の不一致への対処をする要素〉→〈求められている反応を示す要素〉→〈断絶をマークする要素〉→〈断絶をマークしない要素〉の順で用いられることが主張されている。

この主張を根拠づける概念としては、相互行為の隣接性 (contiguity) (Sacks 1987) への選好が挙げられている。すなわち、《遡及指向要素》は、前の発話との隣接性、《後続指向要素》は、後続発話との隣接性を保持しており、これは、会話という時間の経過と共に展開する相互行為の性質上、必然的な規則であると言える。また、このような順序規則があることを裏付ける現象として、規則に反した順序で用いられる場合があることについても考察されており、この規則の妥当性に説得力を持たせている。

本論文は、個々の発話冒頭要素の働きを分析するものではないため、それぞれの要素の順序についてのみ記述され、その働きとの関連が明らかにされないまま分類がなされる箇所がある点で、議論に物足りなさが残る。また、上述のカテゴリー間の順序規則が平面的であり、本来全く異なる次元の行為を担っていると思われる、《遡及指向要素》と《後続指向要素》が、同じ次元で扱われている点について、相互行為の研究としては不十分であることも否定できない。これらの問題はあっても、発話冒頭要素全体を扱って、包括的な議論を展開している先駆的な研究である点、および多くのデータに基づいた実証的な研究であり、母語話者の実感の的確に規則として提示できている点を、博士の学位にふさわしい論文であると判断し、合格と認める。